

創造 第五十七号（令和 5 年度） 校長あいさつ

毎年編集される「創造」は、一年を振り返るものであるとともに、卒業する学生諸君にとっては高専生活の全体を振り返るものとなります。

そこで、高専で勉強することの意味をもう一度振り返ってみたいと思います。

小学校 6 年間、中学校 3 年間、高等学校 3 年間、大学 4 年間、というのが六三三四制ともいわれる日本の単線型の教育制度です。これは第二次世界大戦後にアメリカの教育制度を取り入れて確立したものです。

戦前の日本は、義務教育の小学校を卒業した後は、先に行くほど枝分かれをしている複線型の教育制度でした。大学の数は帝国大学などごく限られていて、学校の先生になるためには師範学校（現在の教育学部）、医師になるためには医学校（現在の医学部）、などなど、旧制中学・旧制高校・帝国大学というルートとは別の進学のルートがいくつも設けられていました。

戦前の日本のような複線型の教育制度では、教育の門戸を広く開いて国民の教育レベルを上げていくことは困難です。つまり、大衆社会の教育制度としては不適格です。

戦後の教育改革で、小学校と中学校の 9 年間で義務教育となり、4 年制の総合大学に師範学校等が統合され、六三三四の単線型の教育制度に移行できたことは、戦後の経済成長を支えるために実に好都合でした。国民の教育水準を一気に引き上げて、大量の人材を社会に送り出すことが可能になりました。

高専が、経済成長を支える優秀な技術者の育成のために設立された、というのはそのとおりですが、教育制度の面からみれば、高専は、単線型の教育制度の例外として特別に設けられた学校であるといえます。

この点に「高校」と「高専」との違いがあります。

現在は、高専で早くから専門的に学ぶことの意義を評価して、大学や大学院が高専生に門戸を開いています。大学等への進学の道がひらけたことにより、教育制度においての高専のデメリットはなくなったといえるでしょう。現在の高専は、中学を卒業して早くから専門的に 5 年間じっくりと勉強できる、というメリットはそのままに、就職も進学もやる気次第で大変恵まれています。

恵まれた境遇にある皆さんですが、恵まれた環境にある人は、どうしても自分が恵まれていることに気がつかない傾向があります。

在校生の皆さんは、自らの恵まれた環境を活かして、やれるだけのことはやってみてください。心がけ一つでチャンスを活かすことも、のがしてしまうこともあります。

「ナントナク」「ベツニ」「フツウ」「ドウデモイッス」と、あえてカタカナで書きましたが、気のない素振りで実力を発揮しない、全力を出さない、そんなことで高専生活を送っては、それは本当にもったいない。皆さんにとっての 5 年間、それも同年代の若者に比べて格段に恵まれた環境にある 5 年間は、皆さんには想像もできないくらいの大きなチャンスなのです。そのチャンスを変なカッコつけで見逃すようなことはしてほしくない。

空振り三振ならまだしも、見逃し三振だけはしないでください。皆さんは、高専に入学したからには打席に立っているわけですから、どんなボールにもくらいついていくべきです。間違っても尻込みするようなことがあってはいけません。

卒業される皆さんにも同じことがいえます。高専卒であるメリットを考えれば、職場でも進学先でも、皆さんは仲間を引っ張るリーダーでなければなりません。皆さんにはそれだけの力があるし、その皆さんの力を期待して企業や大学等が皆さんを受け入れてくれるのです。彼らが皆さんを獲得するためにどれだけの力を割いているか、どれだけ全国の高専を回って採用活動をしているか、考えたことがありますか。

あまり考えられないことではありますが、もしも皆さんが自らの力を発揮できない、挑戦するチャンスが与えられない環境に置かれたならば、皆さんは自信を持って「私がやります。」と申し出るべきです。社会に出れば、先生が課題を与えてくれるように仕事を与えられると思ったら間違いです。仕事は自ら進んで取り組む者にだけ与えられます。

大学では、教員と学生は研究者として対等です。方や経験と実績を積んだ研究者、方やこれから経験を積まなければならない研究者、という違いだけです。研究者として先生や先輩とフェアに議論のできない者には、大学で学ぶ資格はないのです。大学で学ぶということの難しさと醍醐味がそこにあります。

私が声を大にして言いたいこと、それは、高専生として、また高専の卒業生として、皆さんには決して自分を安売りしてほしくない、ということです。皆さんには、常に視線を上を保って、皆さんの力で仲間を引っ張って、くじけないで前向きな挑戦を続けていってほしい。

私は皆さんに、スケールの大きな活躍を期待します。